

何のために勉強するのか
- インドの予備校を見て考える -

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただきありがとうございます。だいが寒くなってきましたので、風邪などひかないように注意していただきたいと思います。

この「開倫塾の時間」では、いろいろな勉強についてお話させていただいています。何のために勉強するのかを考えると非常に参考になるのが、ほかの国の取り組みです。

2. 何のために勉強するのか

(1)今年の1月頃に、NHKで「インドの衝撃」というスペシャル番組が放送されました。たまたま本屋さんに行きましたら、この番組の取材班がお書きになった本、「インドの衝撃」を本にしたものが売っていらっしゃいましたので、読ませていただきました。私はこの番組を2度見たのですが、すばらしい番組でした。本にはもう少し詳しいことが書いてあり、本を読み、更に深い感銘を受けました。この本は文芸春秋社から出ていますので、是非皆さんもお買い求めになって読んでいただきたいと思います。

(2)私は学習塾をやらせていただいていますので、一番感銘を受けたのはインドの予備校はどのようなものかということです。インドには経済的に貧しい地域がたくさんあります。そのような貧しい地域の中でカマールさんという方がやっていらっしゃる数学アカデミー・予備校がとりあげられていました。その予備校は、IIT(Indian Institutes of Technology)、インド工科大学という日本のトップクラスの理系大学よりもはるかに難しいといわれる大学に、毎年毎年合格者を出している予備校です。IIT(インド工科大学)受験専門の予備校は、普通、1か月の授業料が3万円、1年半では54万円になります。しかし、カマールさんのやっているラマール・ジャン数学アカデミーという予備校の授業料は、その50分の1以下です。とても貧しいビハールという地域の親でも何とか払えるような金額にしようと、カマールさんは考えて予備校をやっています。この予備校は1クラス1000名で、屋根だけで壁はなく、雨が降ったら雨漏りがするというところです。その中でマイクを使って授業をしています。

(3) 写真を見ますと、トタン屋根のラマール・ジャン数学アカデミーには生徒がぎっしりつまって朝から晩まで勉強しています。受験生たちは何のために勉強するのか。生活を豊かにしたい。国の経済をもっともっとよくしたい。非常に純粋な目的のために勉強をしているようです。例えば、「私は、物心ついたころから家の貧しさばかりを思い知らされていた。お祭りのときなど、みんな新しい服を買ってもらってそれを着ているのに、うちだけは買ってもらえなかった。一所懸命勉強してインド工科大学(IIT)に入り、立派なエンジニアになりたい。そして、IT の会社を設立したい。そうすれば、家族を豊かにしてあげることができる」と、そこで勉強している 19 歳の学生は述べていました。アザード・クマールさんという方です。

「自分の住んでいる村のほとんどの子どもたちは、小学校にすら通っていない。朝から日が暮れるまでただ遊んでいるだけか、少し大きくなれば畑仕事の手伝いをしているだけである。村に学校を作って、僕と弟たちで先生を育て、村の誰もがここにいながら学校というところで勉強できるようにしたい。そうすれば村の状況を大きく改善することができるだろう」という思いで、一所懸命勉強しているということでした。

彼のご両親は非常に生活が困窮しています。そのため、インド工科大学(IIT)を受験するのにかかる約 3000 円の受験料を稼ぐために、親戚中で働いているとのこと。年収が一家で 5 万円になるとよいほうだということですので、受験料として 3000 円を捻出するのは非常に大変だということです。また、予備校では、彼らを支えるために合宿所を作って、特に優秀な学生 30 名を学費免除・生活費免除でそこで勉強させているとのこと。

「今は小さな羽根のようなものだけれども、息子が熱意・大志を抱く姿を見ていると、その翼はどんどん大きくなって空高く羽ばたいてくれるだろうと思う」という気持ちで親は子どもを支え、村全体で優秀な学生を応援しているそうです。このように、若者一人ひとりが、故郷と国を変えるというつもりで勉強しているこのインドのような国も世の中にはあります。

(4) 翻って、日本で勉強している人はどのようなつもりで勉強しているのでしょうか。それは、ご自分で考えたらよいと思います。できるだけ視野を広く持って、世界の国々では自分と同じような立場の人はどのようなつもりで、また、どのような状況で勉強しているのかを頭の片隅に入れて、今の自分の勉強を振り返ってみると、勉強にもターボ・エンジンがつく馬力がでるのではないかと思います。

3. おわりに

そこで今日は、NHK のスペシャル番組の取材班がお書きになった、文芸春秋社刊「インドの衝撃」という本を紹介させていただきました。是非皆様もお読み下さい。